

4-1-6-3 脳神経外科

1. 概要

1.1 国立成育医療センター脳神経外科の活動と特色

国立成育医療センター設立とともに歩み始めた脳神経外科の活動も丸4年を経た。ここまでの実績は自信を持つべきものがあると考えており、センター内での存在感だけでなく広く国内に国立成育医療センター脳神経外科の存在を知らしめてきたと自負している。これは単に入院患者数・手術件数という数値的な問題だけでなく、行っている医療の質・内容及び学会活動など学術面も含めての評価である。現在の医療をとり巡る環境は厳しいものがあるが、小児脳神経外科領域における国内の指導的立場に甘んじるのみでなく、今後は広く視野を世界に求めてレベルの向上を図っていくつもりである。同時に、これまで同様小児脳神経外科エキスパートの育成という役割も担い、小児神経外科を希望する若手脳神経外科医に出身・所属と関係なく研修できる環境を提供していきたいと考えている。

脳神経外科手術数は、設立された2002年度の64件から昨年度(2005年)は220件と大きな伸びをみることができた。手術患者数は146名であり、平均すると一人約1.5回の手術となる。小児脳神経外科患者の中には複数の異常を伴ったりあるいは段階的に手術を予定する必要がある乳幼児も少なくない。容易ではないが、できるだけ手術患者数と手術件数比を1に近づけられるよう、合併症の少ない手術を目指したいと考えている。一方で、手術患者数146名という事実は、施設の認知も含めまだまだ努力すべき余地が大きいことも意味している。大学の関連病院として自然に患者が集まってくるわけではない以上、一般病院・小児科医にもさらに信頼されるよう実績を積み重ね連携を強めていきたいところである。

診療内容については設立以来の歩みを確実に積み重ねているところである。水頭症に対してはシャント手術を合併症なく遂行すると同時に、可能な限り神経内視鏡手術で治療する方針で取り組んでいる。内視鏡的脈絡叢凝固術による水頭症治療は国内外で再評価されており、今後も適応を広めていきたいと考えている。脊髄脂肪腫については泌尿器科・外科からの紹介も増え、今後は長期的な直腸膀胱機能改善効果を、各科協力して観察していく予定である。脳性麻痺小児の痙縮に対する機能的脊髄後根切断術は手術成績も良く家族の満足度も高い成育ならではの手術として認められてきている。頭蓋頸椎移行部病変あるいは頭蓋底脳瘤など脳神経外科分野で最も手術困難とされる頭蓋底外科領域においても、小児関連疾患では一目置かれる存在となってきている。複雑な症例でも形成外科を中心とした外科系チーム医療及び術後のICU・総合診療部の献身的な協力の下に手術を成功に導くことが可能であり、その点については改めて感謝申し上げたい。また、今年度も新生児・乳幼児症例が約半数を占め、当センターの大きな特徴となっている。胎児診断・治療については今後の課題としつつ、胎児脳室拡大児の長期経過観察など可能な部分から取り組みを開始したいと考えている。ナショナルセンターの使命として難易度の高い手術・治療法の開発が待たれる分野に対し、これまで通り積極的に使命感を持って取り組んでいくつもりである。

2. 診療及び研究活動

2.1 診療体制

脳神経外科の診療は医長1、医員1、研修医1の3名で手術・病棟・外来をこなしている。手術は月曜、水曜、金曜を中心に行っている。緊急手術に関しては麻酔科、手術室の協力の元に随時行っている。外来は火曜、木曜であり、今年度は形成外科と共同でセコンドオピニオン外来を開始予定である。

2.2 2005年度手術症例

水頭症	69	
VP/SP シャント(新設)		18
VP/SP シャント(再建)		8
神経内視鏡手術		8
リザーバー設置、シャント抜去、内シャント他		35
先天奇形	63	
二分頭蓋		3
脊髄髄膜瘤		7
脊髄脂肪腫(脂肪脊髄髄膜瘤など含む)		19
脊髄係留		2
頭蓋骨縫合早期癒合症		11
頭蓋内嚢胞性病変(くも膜嚢胞他)		6
頭蓋頸椎移行部病変		7
その他		8
機能的疾患	21	
痙直型脳性麻痺 / 痙縮		
機能的脊髄後根切断術		20
その他		1
腫瘍	25	
脳腫瘍		
テント上		14
テント下		2
脊髄腫瘍		2
頭蓋骨腫瘍		7
血管障害	10	
もやもや / 類もやもや病		2
頭蓋内 / 脳室内出血		5
ガレン大静脈瘤、脊髄動静脈瘻など		3
外傷	13	
硬膜下血腫 / 硬膜外血腫 / 硬膜下液貯留		7
その他		6
その他	19	
総計	220	

3. 研修会・講演会

臨床小児神経外科懇話会 約3ヵ月毎に開催。